

『萬葉集』柿本人麻呂「至宇治河辺」作歌」考

榎戸 渉 吾

はじめに

『萬葉集』卷三には、柿本人麻呂が近江国より上京する際、宇治川のとりで詠んだ作として以下の歌が載る。

柿本朝臣人麻呂從「近江国」上京時 至「宇治河辺」作歌一首
物の部の八十氏河のあじろ木にいさよふ浪の去く^{ゆへ}辺しらずも^①

(3・二六四 柿本人麻呂)

『萬葉集』の中でも著名な一首であるが、「宇治河の辺」に「至」つて「あじろ木にいさよふ浪の去く辺しらずも」と述べたその感慨が何に起因するものなのかという点が古くから問題にされてきた。近年では、眼前に見える実景に無常を感じたものと理解し、さらに「もののふ」の語に精悍な古代戦士のイメージを見出し、壬申の乱で敗れた近江朝の「もののふ」達の流亡の相が宇治川の川波に重ね合わされて形象化しているとした、土橋寛「一九五六」の解釈を支持す

る注釈書が多い。

しかし、この解釈は、本歌が同じ人麻呂作の近江荒都歌(1・二九(三二))と近い時期の作と仮定して行われたものである。『釈注』が「同じ折の歌なら、なぜ卷一に採らなかつたか、不審が残る」と述べるように、本歌の理解に近江旧都を後にしての感慨を前提とするならば、巻を違えて収載された点に疑問が残る。「近江国」とある題詞に近江朝が連想されるとしても、まずは本歌が帰京の途上で詠まれた歌としていかなるものと理解できるかを考えるべきであろう。

そこで本稿では、旅中、波の行方を持ち出して自らの感慨を述べることがいかなる意味を持つものであるのか、さらにそれはいかなる心情の表れであるのかを検討する。その上で、改めて旅中の詠である本歌の性格を考えてみたい。

一 二六四番歌の問題の所在

本歌の最大の問題点は、「あじろ木にいさよふ浪の去く辺しらずも」と述べるその感慨の内実が明瞭でないことである。

この点について、契沖は、『代匠記』（初）において、

哥の心は、うち川のいさきよくおもしろきにのそみて、なかめをるに興きはまればかなしみきたるならひにて、あしろ木のもとしはしいさよふとみゆる浪の、ゆくゑもしらすなるに感じて、人の世にふるほともこれにことならぬよと観するなり。論

語曰。子在川上曰。逝者如斯夫、不舍晝夜。今の哥此心なり。

と説き、さらに『代匠記』（精）では、

人ノ世ノ生住異滅ノ四相ノ中ニ、暫ラク住スルコト思フニ程ナク異相ニ遷サレ行ヲ、水ノ網代木ニフレテ暫ヤスラフト見ユルカ、ヤカテ流過ルニ感シテヨマレタリ。

と述べた。つまり、本歌の感慨は『論語』のいわゆる「川上の嘆」と同様のものであり、实景に臨んで世の無常を感じた歌であると理解したのである。

本歌の詠嘆を無常感と捉えた契沖の解釈は、例えば『全歌講義』が「朝廷に仕える官人たちの多くの氏人たち、そのウヂ（氏）ではないが、宇治川の網代木にさえぎられてたゞよっている波はどこへ行くのか。その行方がわからないことだよ。（人の世もこの波と同

様だ）」と口語訳し、また、『新版岩文』が「波の行方に無常を観じた歌」と釈すように、現在の通説の源となつていと言つて良い。²

もちろん、契沖説に批判がなかった訳ではない。『古義』は、

此は打聴えたるまゝにて、他によそへたる意も何もなきを、今打誦に、其処の景の目の前にうかびて、見るやうに思はるゝは、上手の作なればなるべし、

と述べ、そこに無常の意味は無く単に实景を述べたものとした。

近代以降の注釈書では、『全註釈』が「去く辺しらずも」の句に着目し、同じ人麻呂作歌である卷二・一六七及び二〇一番歌を例に掲げ、

（稿者注、これら二例は）行ク方知ラズの句を、どうしてよいかわからない意に使っている。これによれば、この歌も、イサヨフ浪ノまでは、实景に即した序詞で、悲歎に暮れる心をこれによつて描いたものと解せられる。

とし、さらに『私注』は、「いさよふ浪の去く辺知らずも」について、「網代木に一時堰き止められた水流が湛へを作った中に川波が停滞して、流れ去るべき方もない様でイサヨウて居る」とものと解し、

しかしそれ（稿者注、「去く辺しらずも」の詠嘆の内実）は契沖の言ふ如く「やがて流過る水」に対する詠嘆ではなく、しばし流れかねてどここほる水に対する詠嘆ではあるまいか。

と述べ、歌に無常感が宿つていゝとする説に批判的な立場を取り、あくまで实景の歌として理解すべきことを主張した。

「ゆくへ知らず」の表現を波が停滞する様と理解した『私注』に對して、『注釈』は「あじろ木にかかつた川の水は、山の端の月と同じく、一時いさよふ事はあつても、いつまでも停滞してゐるものではない」と述べ、「ゆくへ知らず」は水の流れ去る行方を述べた表現であるとし、そのうえで本歌は「実景に対する感懷に無常觀がやどされてゐる」歌であると結論づけた。

このように、「ゆくへ知らず」の表現をいかに捉えるかという点は、本歌が何を詠む歌であるのかという点を明らかにするうえで重要である。本稿の立場は節を改めて示したい。

他方、上二句「物の部の八十氏河の」と結句とを積極的に関連させて理解しようとした論もある。窪田『評釈』は、

「物の部の八十氏河」は、成句となつていたと思われるものであるが、これは天皇の宮廷を思わせるもので、偶然なものではなく、「いさよふ浪の去辺しらずも」は、最も適切に大津の荒

都の成行きを思わせるものである。（中略）人麿平生の心と、大津の荒都に対する悲哀とを一丸とし、象徴ともいふべき文芸

的な方法をもつて詠んだのが、この一首だと思われる。とし、題詞と上二句を関わらせながら、結句の詠嘆を「推移の跡のあまりにもはかないのを悲しむ心である」とした。

さらに、土橋「一九五六」は、本歌が近江荒都を見て大和へ上る途中で詠まれたことを前提としながら、本歌を次のように理解する。

古代のモノノフの流亡の姿は、壬申の乱に破れた近江朝廷側の

それにおいてもつとも悲劇的であり、それに対する詠歎が壬申の乱の古戦場たる宇治の川波に面して歌われているのである（稿者注、括弧内略）。「もののふの八十氏河」とか、「もののふ

の宇治川渡り」という序詞は、この歌のほかにも三首あるから、これも単に機械的に冠せた序詞に過ぎないという風に見られるが、わたくしにはこの序詞のものものしい語感と下句の川波の流れとの結びつきに、一種の悲劇的な相を感じないわけにはゆかないし、壬申の乱以後の世の中の動きというものに無関心に、単に川の流れを詠んだ叙景歌と見ることもできないのである。

「物の部の八十氏河」の序詞に精悍な古代戦士のイメージがあり、壬申の乱に破れた古代豪族の流亡の姿が、「物の部の八十氏河」として乱にちなみある宇治川の川波に重ね合わされて形象化されていると云うのである（同氏校注の『開眼』も同様）。

冒頭でも述べたが、近年では、本歌を近江荒都歌と積極的に関わらせて解釈を試みる土橋説を支持する注釈書が多く（西宮『全注』・『釈注』・『全歌講義』）、歌の理解は定まったかに見える。

しかし、以上に概観した研究史において等閑に付されてきた理解に無視できないものがある。すなわち、旅の身の上を波になぞらえたものとする説である。

この理解は、つとに『宗祇抄』で提示されていた。『宗祇抄』は、「行衛しらすもとは旅の心也。なかる、浪のゆくゑなきによそへたる也」としており、これを『拾穂抄』が引用している。川波の行方

が定かではないことを引き合いにだし、旅の身のよるべのなさを詠嘆したものと言うのであろう。

この理解を強く主張したのが荷田春満である。春満は、まず『春満問答』において、「人丸漂泊の身上をよめる歌にてあまりあるほど感慨ある歌也」とし、さらに『童子問』において「標題と合せて此歌を解へき」という態度を打ち出し、下の句と序詞との関係を

冠句に物乃部能とよめるも身上に比する歌故に人倫の冠句を置て身上を網代木にいさよふ浪のこしく我身するの落着をもしろす旅寓の題を詠たまへるとみる也。

と説き、歌意は「題によりて歌は心得へき事なれハ旅寓の意趣を全とすへし」とした。

そして最終的に、荷田信名の『童蒙抄』は、

歌の意は、近江より大和は上り来れる折しも、宇治川を経て通れるに川中の阿代に波のいざよふ景色を見て、その当然の風景をよめる也。下の意には人丸任国に従ひては彼方此方と転変する、身の上のうちつきどころも不定事など感慨して詠めるにてもあらんか。

とし、あちこちを移動して落ち着くことのない、次にどこに行くのかわからない旅の身の上を宇治川の川波になぞらえて嘆いたものと解した。

こうした理解は、尾崎暢映「一九五五」が『童子問』・『童蒙抄』を引用する他は、研究史上ほとんど言及されて来なかった。契沖以

来の通説とは異なる理解がありながら、その当否が検証されて来なかった点は問題であらう。

そもそも、近江荒都歌と二六四番歌とは両者が巻を違えて存している以上、本歌を考えるうえで近江荒都歌を関わらせることには慎重であるべきだろう。「近江国」の題詞に近江荒都が連想されるところでも、まずはあくまで本歌の表現に即して本歌を解釈することが必要なのではないか。⁽³⁾

この点をふまえ、以下では本歌の表現を改めて精査し、本歌は旅中の詠としていかなる感慨を詠んだものと考えられるのか検討していく。

二 二六四番歌の表現

冒頭の「物の部の」は朝廷に仕える官人の数の多さから「八十」を導く枕詞で、さらに「物の部の八十氏」は「氏」と地名「宇治」との同音で「氏河」を導く序詞となっている。

その「もののふ」は、

秋野にはいまこそゆかめもののふのをとこをみなのはなにほひ見に

(20・四三一七 大伴家持)

の例に見えるように「朝廷に仕える文武百官」(『時代別』)の意を持ち、必ずしも武官のみを指す語ではない。

この点について、土橋「一九五六」は、「もののふ」の語は「野

性的で剽悍な古代豪族の武士を表わす言葉である」と述べている。確かに『萬葉集』には、

天雲の 向か伏す国の 武士と 云はるる人は 皇祖の 神の
御門に 外の重に 立ち候ひ 内の重に 仕へ奉り……

(3・四四三 大伴三中)

の例のように「もののふ」を武人に限定して使用した例がある。しかし、小野寛「一九八八」が「もののふ」は「武人に限らない」と注意するように、二六四番歌の「もののふ」を右の例と同様に武人の意に限定して解釈する積極的な理由は無いと思われる⁽⁴⁾。

この序詞はむしろ、『全訳注』が「官人としての旅情による表現か」と言うように、官人として旅をしているがゆえに選ばれた表現であると考えるのが適当なのではないか。

……衣手の 田上山の 真木さく 檜の 嬌手を 物のふの 八
十氏河に 玉藻成す 浮べ流せれ 其を取ると さわく御民も
…… (1・五〇 役民)

右は、藤原京造宮に関わった役民の歌で、引用箇所は宇治川に流れる角材を取ろうと皆が競って働く様を描写している。ここでの「物のふの 八十氏河」は、まさに「もののふ」たちが集う造宮現場の賑やかな様子を表現するのに効果を發揮していると言えよう。

この意味で、岡田喜久男「一九七六」が二六四番歌の序詞について「宮廷の華やかな生活を思わせる語句である」と述べたのは首肯できよう。これから帰還すべき憧れの藤原京を想起させる句として、

『萬葉集』柿本人麻呂「至」宇治河辺「作歌」考

当該の序詞はふさわしかったのではないか。

その序詞に続く「あじろ木」は、冬に氷魚を捕るための仕掛けである網代を設ける場所に打った杭のことで、竹などで編んだ仕掛けを取り払って残った部分を指す。『枕草子』(三巻本)では「春の網代」は「すさまじきもの」と評されており、また、金子『評釈』が「寂寞たる風趣」としたとおり、漁の盛りを過ぎて放置された仕掛けは寂寥感を掻き立てる景であつたのだろう。活気ある都を感じさせる上二句から、一転して網代木という物寂しい景に焦点を当てた点は、これから述べられる下二句への不安を感じさせよう。

そうした寂寞たる網代木には、波が「いさよ」うていと表現される。「いさよふ」は、『萬葉集』中、本歌を除いて九例見られる語で、「月・雲・心」について用いられる。

- A 山のはにいさよふ月の出でむかと我が待つ君が夜は更降につ
つ (6・一〇〇八 忌部黒麻呂)
- B 見えずとも孰恋ひざらめ山の末にいさよふ月を外に見てしか
る (3・三九三 沙弥満誓)
- C 山の末にいさよふ月を出でむかと待ちつつ居るに夜そ降にけ
る (7・一〇七一)
- D 山の末にいさよふ月を何時とかも吾が待ち座らむ夜は深去に
つつ (7・一〇八四)
- E 隠口の泊瀬の山の山の際にいさよふ雲は妹にかも有らむ
(3・四二八 柿本人麻呂)

F あをねろにたなびくものいさよひにものをそおもふとしの
このころ (14・三五二 東歌)

G ひとねろにいはるものからあをねろにいさよふくものよそり
づまはも (14・三五二 東歌)

H 春日を 春日の山の 高座の 御笠の山に 朝離らず 雲居
たな引き 容鳥の 間無く数鳴く 雲居なす 心いさよひ
其の鳥の 片恋のみに 昼はも 日の尽 夜はも 夜の尽
立ちて居て 念ひそ吾が為る 相はぬ児故に

I ……立ちて座て たどきを知らに 村肝の 心いさよひ 解
き衣の 思ひ乱れて… (3・三七二 山部赤人)

A 〵 Dは「月」の例である。Aは、忌部黒麻呂が友人の来訪が遅

いことを恨んで詠んだ歌。山の端に「いさよふ」月がいつ出てくるのかと待つ様を、「君」の訪れを待ちわびる気持ちに譬えたものである。生田周史「一九九二」は、この歌の「いさよふ」について「時が経過した故に『月の出でむか』とは思うのであるが同じ位置にあるのを『不知世経』と判断するのである」と述べ、「いさよふ」が、対象がその場を動かないことを視覚によって判断した結果を表す語であることを説いた。

このことは、Bに明らかであろう。表現主体は、対象の姿が見えなくとも恋をしてしまうということを、山の端に停滞したまま隠れている月に譬え、たとえその姿がはっきりと見えていなくても見て

いたいという願望を述べている。月の「いさよ」うている状態は、表現主体の視覚によって判断されているのである。

この点は、「雲」について用いられたE〵Gの例も同様である。

Eは、泊瀬山に土形娘子が火葬された時の人麻呂の歌。表現主体は、一度山の間にふわふわと浮かぶ雲を見、時間が経過した後に改めてまた雲を見るのだが、その雲は前と変わらずそこにあった。そのことを雲が「いさよふ」と述べているのであろう。

そうした視覚による判断を表す「いさよふ」は、自然物を譬喩として心情を表す際にも用いられた。Fは、物思いする心情を青い嶺にたなびく雲に譬えた例。この場合の「いさよふ」は、その場を動かすただそこに留まるばかりの雲のように停滞した気持ちでいるということであり、ぐずついて気持ちをはずき打ち出せないでいるということだろう。Gは、女を我がものにできない嘆きを詠んだ男の歌。「よそりづま」は周囲から関係が噂されている妻の意で、関係を進展させることのできないことの譬喩として、その場に漂うばかりの「いさよふ雲」が持ち出されている。

さらに、こうした心情の譬喩としての「いさよふ」は、「心」を直接形容する際にも用いられた。Hは、春日山にたなびく雲のように私の「心」も「いさよ」うていると述べたもの。表現主体は妹に「片恋」しているために昼夜を問わず物思いをしており、その様を「雲居なす」ところの心で表現している。「心いさよひ」とは、A〵Gの例より、「心」がふわふわと漂う状態を言ったものと思われ、

どうして良いかわからず逡巡する気持ちにこめられているのだろう。Iは牽牛の立場の七夕歌で、逢瀬を待つ感慨を述べたもの。「心いさよひ」は「思ひ乱れて」と対になっており、心がふわふわと揺れ動き乱れる様を表現している。ここも織女と会うまでの間、居ても立っても居られない気持ちでぐずぐずしている様を表現していると考えられる。

二六四番歌の「いさよふ」は「浪」について用いられている。表現主体の眼前の景である宇治川を行く波が綱代木に打ち寄せ、そのうねりが碎けてその場に漂うことを描写したのが「いさよふ浪」だろう。川面に走る波は綱代木にせき止められてその場に碎けてたゆとうているのである。

その一方で、その「いさよふ」の表現が多く自らの揺れる心情を述べるために用いられていた点は重要であろう。先に述べたとおり、「いさよふ」は表現主体の視覚による判断を表す語であるが、同時に、表現主体自らの心の揺れ動きを表すためにも用いられた。これらの歌では、心を決めかね逡巡する思いが「いさよふ」にこめられているのである。このことからすれば、近江国から都へ移動中に詠まれた当歌についても、旅の途上にある表現主体の心情が表出していると思われるのではないか。つまり、「綱代木にいさよふ浪」には、綱代木の周りに漂う波のような自らの身の上が表現されているものと考えるのである。

そして、一首の感慨は結句「去く方知らずも」に述べられる。「ゆ

くへ」の語は『萬葉集』中他に十五例と風土記歌謡に一例を見い出せ、「知らず」や「無し」の語とともに用いられた。

A ……其故に 皇子の宮人 行方知らずも

B ……刺す竹の 皇子の宮人 帰く方知らに為す

C 埴安の池の堤の隠沼の去く方を知らに舍人は迷惑ふ

D ……もちどりの かからはしもよ ゆくへしらねば うけぐ

つを ぬきつるごとく ふみぬきて ゆくちふひとは いは
きより なりでしひとか ながのらさね……

E 数多有らぬ名をしも惜しみ埋木の下ゆそ恋ふる去く方知らず
て

F ……剣刀 鞘ゆ抜き出て 伊香胡山 如何にか吾が為む 往
く辺知らずて

G ……立ちて居て 去く方も知らず 朝霧の 思ひ或ひて……

H ……さよふけて ゆくへをしらに あがころ あかしのう
らに ふねとめて うきねをしつつ……

I ゆくへなくありわたるともほととぎすなきしわたらばかくや

しのはむ

(18・四〇九〇 大伴家持)

J あまのはらふりさけみればかすみたちいへちまどひてゆくへ
しらずも

(丹後国風土記逸文)

K 大埼の^{ありそ}有磯の^{わたりは}渡延ふくずの往く方も無くや^{わた}恋度りなむ

(12・三〇七二)

L 雲隠り去く方を無みと吾が恋ふる月をや君が見まほり^す為る

(6・九八四 大宅)

M 去く方無み隠れる小沼の下思ひに吾そ物念ふ^{このころ}頃者の間

(12・三〇二二)

N 御^み佩^{はかし}を 劍の池の 蓮葉に 渟^{なま}れる水の 往く方無み 我が
為る時に……

(13・三二八九)

O 大伴の三津の浜辺を打ち曝しよせ来る浪の逝く方知らずも

(7・一一五一)

P 水沙^{みさご}児居る奥つ^{ありそ}麓磯に^よ縁する浪往く方も知らず吾が恋ふらく
は

(11・二七三九)

A―Cは人麻呂歌の例で、それぞれ草壁皇子・高市皇子が亡くなり、「宮人」や「舍人」がこの先の行き方がわからないでいることを表現している。『全註釈』が「どうしてよいかわからない意に使用している」と言うとおりであろう。人麻呂歌と同様に人事について用いられたD―Jの例も、これからの自らの行き先がわからないことから、どうして良いかわからないの意で理解できよう。

一方で、K―Pは自然物について用いられた例である。Kは、渡

り場に這いまわる葛のように行方無く恋い渡ることだろうか、と片恋の辛さを述べた歌。大磯の荒磯の渡し場に這い延びる葛はあてどもなく延びることから「往く方も無くや」を導いており、次に取るべき方策も無く一人恋に行き詰まる嘆きが表現されている。

Lは、「月」を「君」に譬えた歌で、「月」＝あなたを見たいと思っているのは私なのに、あなたがその雲隠れしてしまった「月」を見たいと言うのはおかしいと、相手の訪れが稀なのを詰った歌。⁽⁶⁾「去く方を無みと」の主体は「月」で、月が雲に隠れてどこへ行ってしまったかわからないことを「雲隠り去く方を無みと」の表現で表している。

しかし、生田「一九九二」は、月が隠れてしまって「ゆくべき方⁽⁷⁾を知らない」では意味が通じなくなるとし、月はもともと「ゆくべき方⁽⁷⁾を知らない」であり、自然のこととしての「行方知らず」の表現には「ゆく方不明の義」がおのずからあったものとする。

自然物が主体の場合に、それが「ゆくべき方を知らない」では意味が通じないとの主張であると思われるが、人事の場合のA―Cが、表現主体が「宮人」や「舍人」を見て、彼らは「行方」がわからなくなっているのだと判断しているように、自然物の場合も、表現主体が対象の自然を観察した結果の判断が「ゆくへ知らず」の表現にこめられているのではないだろうか。Lについて言えば、月が雲に隠れてしまったことに対して行方が知れなくなってしまった、つまり月はどこへ行ったかわからない、と表現主体が判断したものと考

えられるのである。

同様のことは、MとOについても言える。Mは「去く方」のない、つまり水の流れる先のない「隠れる小沼」のように片思いの気持ちが行き詰まってしまっていると述べた歌である。隠り沼の水が流れ出る先がないことを「行方なし」と表現し、それと同じように行き詰まっている自らの恋心を述べたものであろう。Nは「蓮葉」に溜まった水の行き先がないことから「往く方無み」と判断したものであり、O・Pも浜辺に打ち寄せる波が行方も知れず消えてしまうことを見て判断した結果の表現であらう。

これらの表現と同じく、二六四番歌もまた、波が宇治川の網代木に至りその場に碎けたゆたう様子を表現主体が見て、その波がどこに行ったかわからずに消えてしまうということを述べた表現であると思われる。

この点について、『注釈』は、「(稿者注、Cの「隠沼」の場合は)水の出口がないのだから『行くところがない』ことになるが、あじろ木にかかった川の水は、山の端の月と同じく、一時いさよふ事はあつても、いつまでも停滞してゐるものではない。浪の流れ去るゆくへがわからないのである」と述べる。確かに、川の水は隠り沼の場合とは異なり常に流れるものであり、波もまた遮るものが無ければ流れ去って行くものだろう。しかし、本歌の場合、川面の波は網代木に打ち寄せているのである。川の水の流れは止まることはないが、本歌はあくまでも波が網代木にぶつかっている様を詠んでいる

ことに注意すべきではないか。

その意味で、『私注』がOについて「作者の脚下に集る波の行く方を作者は知らない」と解くのはをかしい。寄り来る波が、作者の立つ岸に来つてそこで行き場がなく摧けてしまふと解すべきであらう」と述べ、本歌についても「波が行くことが出来ない」と見るべきではあるまいか」と述べたのは、首肯できよう。つまり、本歌における「ゆくへ知らず」の表現は、網代木にぶかった波がその場でたゆたい、やがてそのうねりがどこかへ消えてしまうという眼前の景を描写したものと考えられるのである。

ところで、「ゆくへ知らず」の表現には、自然物について用いられたKとPのうち、KやM、Pに顕著のように、自らのやり場のない気持ちや先の見通せないことへの不安を託すことが可能であった。このことからすれば、当該二六四番歌についても、結句「去く方知らずも」に何らかの感情が寓意されていると見ることができのではないか。

この点について、『全訳注』が本歌を「もののふの多くの人、その氏——宇治川の網代の木にただよいつづける波のように、行末のはかり難いことよ」と訳出したのは示唆的である。本歌は官人として旅を続ける自らの境遇を「浪」になぞらえた歌であると言うのであろう。⁽⁸⁾さらに、小野「二九八八」は、試案と断りながらも、「網代木にぶつかつてためらっている川波が行く方知らずになつてゆくことよというよりは、どうしていいか迷っていると見て、その川波

のように、自分もこれからどうなるのかわからないとする解釈」を提示し、表現主体の思いを述べた歌である可能性を示している。

既に述べたように、本歌は題詞に「近江国より上り来る時」とあるように、官人として旅をする中で、帰京の途次に詠まれた歌である。結句「去く辺しらずも」は、宇治川の景を述べたものであるが、そこには官人として命じられるままに旅をしなければならず、次にどこへ行くのかもわからないという不安がこめられているのではないか。

では、この感慨はいかなる状況のもとで喚起されるのだろうか。次節では、この点を類歌との比較によって検討し、さらに、こうした表現が持つ背景について考えてみたい。

三 「去く方知らずも」の感慨を喚起するもの

大伴の三津の浜辺を打ち曝しよせ来る浪の逝く方知らずも

(7・一一五) (〇再掲)

右は、下二句の類似から二六四番歌の類歌として指摘される「撰津作」の題を持つ歌である。「打ち曝し」は水が浜辺を洗い流す様を言ったもので、限りなく寄せて来る波が行方も知れず消えてしまふ様子を詠んでいる。

多田一臣「二〇〇九」は、二六四番歌と一一五一番歌との違いについて、「三津の浜辺」を歌うことで「土地讃めの歌としての意味

がつよく現れている」とし、土地讃めの意味がより明瞭な歌として、次の歌を掲げる⁽⁹⁾。

住吉の岸の松が根打ち曝し縁^よせ来る浪の音の清けさ

(7・一一五九)

打ち寄せる浪の音の清らかさを詠んだ一一五一番歌の類歌である。「さやけし」は明るく清らかな様を言う語で、

み吉野の 芳野の宮は 山からし 貴く有らし 水^{みな}からし 清
けく有らし…… (3・三一五 大伴旅人)

のように、その土地を讃美する表現として用いられた。同じ表現を持つ一一五九番歌は、確かに住吉を讃めた土地讃めの歌として理解することができよう。

しかし、このことは「音の清けさ」ではなく「逝く方知らずも」の結句を持つ一一五一番歌を讃歌と理解して良いことにはなるまい。前節で見たように、「ゆくへ知らず」の表現を讃美表現として用いたものは無く、行方の知れないことを述べることは、むしろ、自らの行き場の無い思いを表現する意図があった。こうした例からすれば、一一五九番歌もその土地の美景を詠ったものではなく、旅先での感慨を詠んだ歌と考えるほうが自然であろう。そして、その感慨とは、次々と打ち寄せてはどこかへ消えていく波のように、旅の身である自らもどこへ行くのかわからないという不安を述べたものなのではないか。

当時の官人は命令によって任地へ赴かなければならなかった。家

郷への帰還を願ったとしても、すぐさまその地から離れることはできないのであり、たとえ帰還がかなったとしてもまた次の命があればどこかへ行かなくてはならない。旅先にあつて「ゆくへ知らずも」の嘆きが起くるのは、この点に起因するのではないか。つまり、任地において帰還を庶幾する気持ちを強めているが、まだそこに留まらなければならない時、家郷思慕と官人としての職務との間で気持ちが揺れてどうして良いかわからなくなる、その心の揺れこそが「ゆくへ知らずも」と詠嘆せざるを得ない、当て所もない思いの表出なのではないだろうか。

二六四番歌は、題詞にあるとおり近江国から帰京する折に詠まれたものである。その意味では、既に帰還の願いは叶い、自らが行くべき方は知れている。しかし、題詞の表現が「上り来る」と京に視点を置いた第三者によるものである点をふまえれば、本歌が京を終着点と定めた者の感慨を詠んだ歌であるとは限らず、歌は命によって旅を続けなければならない官人としての不安定な境遇を詠んだものと見ることはできないか。

つまり、本歌は、一時帰京できたとしても自分の意思とは裏腹に命令にに応じてまた任地へ赴かざるを得ない現実に対して「去く方知らずも」と詠嘆したものと考えるのである。できれば家郷で落ち着きたい思いと、またすぐに命に従い旅に出なければならぬ実状との間で揺れる思いが「いさよふ浪」に表出されているのであり、次にどこへ行くのかもわからず官命に翻弄される現実が「去く方知ら

ずも」の感慨を産んだのではないか。

そして、このように官命を受けて旅をしなければならない身の上を嘆いた歌の表現は、以下のような漢詩の表現類型の影響を見出だせよう。⁽¹⁰⁾

A 孤客傷、逝湍、徒旅苦奔峭。「孤客は逝湍に痛み、徒旅は奔峭に苦しむ。」

(謝靈運「七里瀨」、《文選》二六・行旅上／《藝文類聚》二七・人部一一・行旅)

B 客行惜日月、崩波不可留。「客行は日月を惜しみ、崩波をば留むべからず。」

(鮑照「還都道中作」、《文選》二七・行旅下／《藝文類聚》二七・人部一一・行旅)

C 此水何時流、此山何時有。人運互推遷、茲器独長久。「此の水何れの時よりか流れ、此の山何れの時よりか有る。人運は互ひに推遷するも、茲の器は独り長久たり。」

(湛方生「帆入南湖」、《藝文類聚》二七・人部一一・行旅)
D 水無暫停流、木有千載貞。寤言賦新詩、忽忘羈客情。「水は暫く流れを停むること無く、木は千載の貞有り。寤言して新詩を賦せば、忽ち羈客の情を忘る。」

(湛方生「還都帆」、《藝文類聚》二七・人部一一・行旅)
E 故山日已遠、風波豈還時。「故山は日ごとに已に遠ざかり、風波豈に還る時あらんや。」

（謝靈運「初発石首城」、『文選』二六・行旅上／「発石首城」、
『藝文類聚』二七・人部一一・行旅）

Aは謝靈運が富春江の上流を船でさかのぼった折の詩で、孤独な旅人が急な川の流れに苦しむ様を述べたもの。『文選 詩篇』は、この「逝湍」には『論語』子罕篇の一節、

子在川上曰、逝者如斯夫。不舍昼夜。（子川上に在りて曰く、
逝く者は斯の如き夫。昼夜を舍めず。）（『論語』子罕篇九）

がふまえられており、「流れる早瀬を過ぎゆく歳月に重ね合わせて感傷にひた」ったものと注している。

続くBは都に帰る折の鮑照の詩。表現主体が一刻も早く都へ帰ろうと時間を惜しんで移動している様子が詠まれており、そのために碎け散る波の上にはゆつくりとは留まれないということを述べ、行旅の身の慌ただしさを嘆いてみせた。

Cは、湛方生が「南湖」を船で行く折に詠んだ詩で、悠久不変の自然物を持ち出しながら、自然との中で生きる人間とを対比し、自然が恒久であることに比べて、人の身の移ろいやすさに思いを馳せた。作者が同じDは、Cとは反対に都に帰る折の詩で、詩作にふけるときのみに「羈客の情」を忘れられると述べている。裏を返せば、「水は暫く流れを停むること無く、木は千載の貞有り」とあるように、川の流れや長い年月変わることのない木々を眺めている時には、常に行旅の不安がつきまとうということだろう。

そして、Eは、遠方の地に赴任し、二度と故郷に帰ることはでき

ないのではないかとという不安を、その場に留まることなくどこかへ吹き流れてしまう「風波」に託して詠んだものである。当て所もなく流れてしまう風や波に、任地へ向かい漂泊する身の上をなぞらえ、行旅の身を嘆いてみせたのである。

これら行旅詩の例からは、旅に伴う不安や焦燥感を託すために、川の流れや波を持ち出す表現類型があったことが伺われる。特に、『藝文類聚』の「行旅」部に右に掲げたこれだけの例を見出すことができることは、上代の歌人にとってこうした類型が容易に獲得可能であったことを示すだろう。

浜辺に打ち寄せる波がいつかへ消えてしまうことを歌った一一五一番歌の表現の背景にあるのは、まさにこうした行旅詩の類型なのでないか。そして、宇治川の網代木に打ち寄せてたゆたう波のように、旅の身である自らの行く末がわからないと述べた二六四番歌も、こうした行旅詩の表現を背景に持つものであろう。特にEは、本歌とは反対に任地へ向かう折の詠ではあるものの、官人として旅をする以上帰郷を願ったとしても思うままにはいかない不安を波風によそえて詠んだものであり、その嘆きは本歌の感慨と通底するものがあろう。

契沖以来の通説は、結句にこもる感慨に人間存在の当て所のないさを見たが、本歌が旅中の詠であることをふまえば、その感慨は旅に起因するものと見るべきではないか。その意味で、荷田春満が本歌を任地を転々として落ち着くことのないさまを波によそえて嘆い

たものと理解した点は首肯できる。本歌は、行旅詩における漂泊の身の上を波になぞらえて嘆く表現の影響を受けながら、一所に落ち着くこともできず、命令のままに任地を転々としなければならない、そうした旅をする官人としての嘆きを詠んだ歌と理解すべきではないだろうか。

おわりに

以上、近江国より上京する折に「宇治河の辺」に「至」って詠まれた本歌を旅中の詠としていかなるものと解釈できるのかについて検討してきた。本歌は題詞に「近江国」とあることから、とかく近江京都歌との関連という点で論じられがちであったが、巻を違えて収載されている以上、両者を関係付けることには慎重な態度が必要であり、本稿ではその立場で本歌の解釈を試みた。

本歌の上二句「物の部の八十氏河の」は、帰還を望む都の華やかなイメージを喚起させることで、下三句で詠まれる詠嘆を一層強調する効果を持っており、「あじろ木にいさよふ浪の去く辺しらずも」と述べたその詠嘆とは、宇治川の物寂しい景に旅の身の上をなぞらえながら、命に応じて任地を転々としなければならない、その不安定な境遇を嘆くものであった。こうした表現の背景にあるのは、流れる水や波に行旅の身の嘆きを託す行旅詩の表現であろう。つまり、本歌は「宇治川の網代木に打ち寄せてはその場にたゆたう波のよう

に、私の行く末もわからないのだ」という、自らの思いとは裏腹に官人として繰り返し旅をしなければならない漂泊の身の上を嘆いた歌であると考えるのである。

注

- (1) 初句原文「物乃部能」は、本歌が載る次点本の広瀬本・紀州本・類聚古集・古葉略類聚鈔のうち紀州本に「物部能」、古葉略類聚鈔に「物部ノ」とあるが、広瀬本・類聚古集、及び新点本系諸本の「物乃部能」が適当であろう。

- (2) 近年では、人麻呂作歌の用字の特殊性を指摘した月岡道晴「二〇一七」が

一首の意は、こたび大津宮の荒れたる跡を見、百官も其半ば忽ちに滅び失せたるを見れば、物部の八十氏と別れたる氏々の人とても、宇治川の網代の杣にしばしいざよひ滞るばかりの世の中にして、つひの行くへは知りがたきわざなるよ、といふなり。

と述べる『檣婦手』を引用し、その解釈に全面的に従っている。

- (3) 本歌及び近江京都歌との関連が指摘される作者が同じ歌として、「柿本朝臣人麻呂歌一首」の題詞を持ち、「淡海の海」が詠み込まれる二六六番歌があるが、二六六番歌の存在が本歌の解釈に及ぼす影響は少ないものと考ええる。

- (4) 多田「二〇〇九」は「もしここに宇治川の戦闘が意識されていたとすると、第一に瀬田橋のあたりが舞台とされなければならない」とし、宇治川と瀬田橋がかかる瀬田川とは区別されると述べ、「もののふ」の語や宇治川という土地に武人による戦闘を意識する土橋説に慎重な立場を取る。

- (5) 浜から荒磯の渡し場へ延びる葛が海に突き当たりもう延びる先がないことから「往く方も無くや」を導くとする説や(『全註釈』・『新大系』など)、蔓が延びて絡まり合ってどこへ行くかわからないことから導くとする説も

ある（『新編全集』）。

(6) 『注釈』・『集成』・『釈注』・『和歌大系』による。

(7) 生田周史「一九九」も同様。

(8) その他、『大系』や『全解』も第四句を第五句の修飾句として訳出する。

(9) 同氏校注の『全解』は二六四番歌についても「対象への讃美とも解せる」と土地讃めの歌である可能性を示唆している。

(10) 旅中の詠における水の表現が行旅詩の影響下にあるという点については、既に榎戸渉吾「二〇二〇」で触れた。

※『萬葉集』の引用は、井手至・毛利正守（校注）『新校注 萬葉集』（和泉書院、二〇〇八）により、私に漢字かな交じりの文に改めた。歌番号は旧国歌大観番号を用いた。風土記歌謡・『枕草子』（三巻本）の引用は、それぞれ秋本吉郎（校注）『風土記』（日本古典文学大系 二（岩波書店））・『平安文学ライブラリー』（日本文学 Web 図書館）による。

※漢詩文の引用は以下の諸本による。原則として通行字体に改め、私に訓み下した。

『論語』＝『論語注疏（十三経注疏）』（北京大学出版社）、『文選』＝『文選李善注』（上海古籍出版）、『藝文類聚』＝『藝文類聚』（中華書局）

※本稿で言及した『萬葉集』の注釈書の略称は以下のとおり。

『宗祇抄』＝宗祇『萬葉集抄』（『萬葉集叢書』（臨川書店）による）、『拾穂抄』＝北村季吟『萬葉拾穂抄』（古典索引刊行会（編）『萬葉拾穂抄』（塙書房）による）、『代匠記』（初）・（精）＝契沖『萬葉代匠記』初稿本・精選本（契沖全集（岩波書店）による）、『春満問答』＝荷田春満『萬葉問答』（『新編荷田全集』（おうふう）による）、『童子問』＝荷田春満『萬葉集童子問』（同上）、『童蒙抄』＝荷田春満・信名『萬葉集童蒙抄』（『荷田全集』（吉川弘文館）による）、『古義』＝鹿持雅澄『萬葉集古義』（広谷国書刊行会）、『檜婦手』＝橘守部『萬葉集檜婦手』（『萬葉集叢書』（臨川書店）による）、金子『評釈』＝金子元臣『萬葉集評釈』（明治書院）、窪田『評釈』＝窪田空穂『萬葉集評

釈』（『窪田空穂全集』（角川書店）による）、『全註釈』＝武田祐吉『萬葉集全註釈』増訂版（角川書店）、『私注』＝土屋文明『萬葉集私注』新訂版（岩波書店）、『大系』＝高木市之助『ほか』（校注）『萬葉集』（『日本古典文学大系』、岩波書店）、『注釈』＝澤瀉久孝『萬葉集注釈』（中央公論社）、『集成』＝青木生子『ほか』（校注）『萬葉集』（『新潮日本古典集成』、新潮社）、『開眼』＝土橋寛『万葉開眼』（NHK出版）、『全訳注』＝中西進『万葉集 全訳注原文付』（講談社）、西宮『全注』＝西宮一民『萬葉集全注』三（有斐閣）、『新編全集』＝小島憲之『ほか』（校注）『萬葉集』（『新編日本古典文学全集』、小学館）、『釈注』＝伊藤博『萬葉集釈注』（集英社）、『和歌大系』＝稲岡耕二『萬葉集』（『和歌文学大系』、明治書院）、『新大系』＝佐竹昭広『ほか』（校注）『萬葉集』（『新日本古典文学大系』、岩波書店）、『全歌講義』＝阿蘇瑞枝『萬葉集全歌講義』（笠間書院）、『全解』＝多田一臣『万葉集全解』（筑摩書房）、『新版岩文』＝佐竹昭広『ほか』（校注）『万葉集』（岩波書店）

※その他、本稿で引用した辞典類・注釈書類は以下のとおり。

『時代別』＝『時代別国語大辞典 上代篇』（三省堂）、『文選 詩篇』＝川合康三『ほか』（訳注）『文選 詩篇』（岩波書店）

引用文献

生田周史「一九九」＝「柿本人麻呂宇治河辺作歌攷」、『国語と国文学』六八・五、一九九一・五

生田周史「一九九九」＝「近江関係歌」、『セミナー万葉の歌人と作品』二、和泉書院、一九九九

榎戸渉吾「二〇二〇」＝「遣新羅使人歌群『古挽歌』の表現」、上代文学会七月例会発表資料（於 Zoom）、二〇二〇・七・二一開催

岡田喜久男「一九七六」＝「近江二首」、山路平四郎・窪田章一郎（編）『柿本人麻呂』、早稲田大学出版部、一九七六

尾崎暢映「一九五五」＝「いさよふ波の行方知らずも考」、『上代文学』六、一九五五・一〇

小野寛「一九八八」『万葉集抄講読（六十三）——宇治川の網代木にいさよふ

波——』、『四季』（四季短歌会）十二—二、一九八八・三

多田一臣「二〇〇九」『近江二首を読む』、万葉七曜会（編）『論集上代文学』

三一、笠間書院、二〇〇九

月岡道晴「二〇一七」『不知代経浪乃去邊白不母——宇治河邊作歌から見る人

麻呂の表記態度について——』、『上代文学』一一八、二〇一七・四

土橋寛「一九五六」『万葉集 作品の鑑賞と批評』、創元社、一九五六